

こころ日記「ぼちぼち」 その③

性は人権

長い間、「性教育」の研究と実践をしてきた。学校現場では、率先して教材を研究し学習計画も提案してきた。日本社会では、まだまだ性について語ることにタブー視され、今でも学校ですら性教育には消極的である。教育現場での位置づけが明確ではないので、性教育の実践は、各学校に任されているのが現状だ。できればやりたくないというのが、教師の本音だろう。

「すべての人間は性的な存在である」と言った人がいる。「性は人権」であることを説明するのは、難しいと感じている。

最近では、ジェンダー、多様な性など性に関する話題が、メディアにも取り上げられる機会が増えた。これらのことが、社会全体に広がり議論され、教育に反映してくれるといいが、なかなかそうはいかないのが現実だ。

30年ほど前、「性教育元年」と言われた時期があった。その時は、やっと性教育の実践が広がると喜んだものだ。しかし見えない力によって、性教育バッシングが起こる。それからの日本の性教育は、残念ながら停滞したままだ。SNSで発信される様々な性の課題。今度ばかりは、一時の流行りに終わらせたくないなと思っている。

性教育は、家庭、学校、地域での実践が大事だ。教員を退いた今、私にできることは地域での「性と生」の発信である。

2019年に子ども若者が集える居場所として「まちの保健室ちむちむ」を開室した。行政の助成制度を利用し、「からだところ」の相談機関としてスタートさせた。主な活動は、子ども・若者への性に関する情報提供、学校などへの出前性教育、支援者のための性の学習会の開催などだ。

2020年、これから活動するという時にコロナ禍に突入。活動に制限はあったが、途切れることなく継続していくことを大事にしたいと、仲間と頑張り、今年3年目を迎えることができた。

地域での小さな活動だが、様々な機関・職種の人達からの相談が増え、性の課題が身近であることを改めて考えさせられる。

援助職に就いている人達からの声のほとんどは、「私たち自身も、自分のからだについてちゃんと学んでこなかった」「性の問題について、どう支援していいかわからない」というもの。

性は特別なものではないと思う。むしろ日常なこと。そのことが、普通に支援の中に含まれていないことに気がつく。

子ども・若者の「性と生」の情報発信の場として始まった保健室だが、援助者のための性教育の学びの場ともなっている。

学びは成長



そんな保健室に、定期的に通ってくるAさんがいる。彼は今45歳。出会いはもう15年程前になるだろうか。

ある人から、個人的に性教育を教えてあげてほしいとの依頼があった。当時彼は、小物を作成する作業所で働いていた。軽い知的障がいがあり、自立に向けて頑張っていた。

作業所の職員には、彼についての悩み事があった。若い女性職員への距離間の問題。そばに近寄り触れる、性的なことを口にするなど。私生活でも、例えばお風呂に入らない、排泄の課題もあった。彼の性への関心の高さに手を焼いていることが切々と伝わってきた。

とりあえず、数人の男性職員とともに、グループでの学習会を始めることにした。

男女のからだの違いから、大人の体に近づくと変化していく事柄など、丁寧に伝えた。まず自分のからだを清潔に大切に扱うこと。セルフプレジャーでの大切なことも伝えた。彼は自分の困りごとなど正直に話をしてくれ、それに答えるといった学習を数回したことを覚えている。

学習会にサポートとして参加していた若い男性職員が、「今まで学んだことがなかったことを知れてよかった！」と感想をもらした。Aさん自身よりも、職員の研修にもなっていたことに、驚きとともに嬉しかったのを覚えている。

Aさんへの性教育の学習は、職場での困りごとの末に実践されたことだが、気になっていたことがあった。彼の母親がそのことを快く思っていなかったことだ。「学習会は性への関心を益々増長させることになる。できれば、何も教えずにいてほしい」との申し出があった。職員と母親との関係や、彼が作業所に来れなくなることを考え、これといった説得する手立てもなく、学習会は終了となった。

保健室開室が再会に…

施設での利用者の性の悩みに、どのように対応すべきか？という相談があった。その利用者の一人にAさんがいたのだ。

久しぶりの会合だった。すっかり成人になったAさんの姿に感動。いやあ、おっさんになっていたことにも…、年月の流れを思った。

彼は、15年前の性教育の学習をしっかりと覚えていてくれた。あれから実家を離れ、今はグループホームに入所し、毎日仕事に出かけているそうだ。

障がいのある仲間とグループを作り、色々な活動をしている。その一つが性教育を学ぶということ。グループの名前は、MMKサークル。意味は「もてて、もてて、こまっちゃう」らしい。男性ばかりだが、性について正しく学び、素敵な恋をすることを目標にしているそうだ。そのサポート役として、「まちの保健室ちむちむ」が選ば

れたのだった。

Aさんは、毎月開催している「性と生」の学習会にも毎回参加している。まずは、自分がしっかり学ぶことで、人に伝えられると言う。MMKサークルでは、リーダーとして性教育の学習会の企画をし、司会もする。

あの時、色々な課題のあったAさん。実生活での悩みは？と尋ねると、自身の健康のこと。ビールもお菓子も大好き、なかなかセーブできないと愚痴る。いい出会いがないとも…。そして、親の健康と介護についても心配している。

保健室には、ヘルパー同伴でないと来れない。まだまだ自立するにはハードルが高い。しかし彼の将来の希望は、好きな彼女ができ結婚すること。彼の思いにより添い、何かいい道筋がないかを考えることが、私たちの役目だと思っている。



性は関係性

施設職員の相談に、施設内の恋愛禁止というものがある。なぜ？と問うてみると、もしもセックスしたら、妊娠したらということが心配とのこと。

ちょっと前まで、中学生の生徒手帳には、「不純異性交遊」禁止といった項目があった。中学校の生徒指導にも、カップルができるとすぐに妊娠を予想する傾向がある。それとよく似ていると思う。

ちなみにAさんの職場、グループホームも恋愛禁止らしい。

誰にでも性的欲求はある。食欲と同じように、コントロールもできる。上手くコントロールするには、スキル学習が大切だ。

中学生にアンケートをとると、一番の悩みは、どうやって好きな人に告白するかだ。そして男女問わず、セックスなどより恋愛に興味があることがトップに！

援助者がイメージする性とのギャップを埋めることが課題だと思っている。

つづく